

橋本 このころはね、高田先生、哲学専攻と名乗っている大学でわざわざ哲学をやりたいという学生でも、何をやるんだということを聞くと、カントをやりますとかプラトンをやりますとかいう具合にオーソドックスな古典を地道に身を入れてやるといっているのでなくて、むしろニイチェとかサルトルとか、なんか手っ取り早いというか、まああまり勉強しなくても気持だけでわかったということなれるようなそういう思想家を選ぶのが、もうほとんどなんですよ、卒業論文を書く場合でもね。先生はそういう感じを持っておられますか。

高田 そんなふうなのでしょいかね。……藤沢さんの

二つの行きかた

哲学と哲学史研究

(問の手)

高田三郎  
橋本絳雄  
藤沢令夫

ほうでは？

藤沢 そうですね。わたくしのほうの大学では一応指導みたいなことしておりますし、わりに古典的なことをやるのが圧倒的といっているほど多いんですけれど、いま橋本さんが言われたようなケースも確かにかなり強い形であることは事実だと思いますね。

橋本 昔から、あるといえればそれは確かにあったすけれどね。

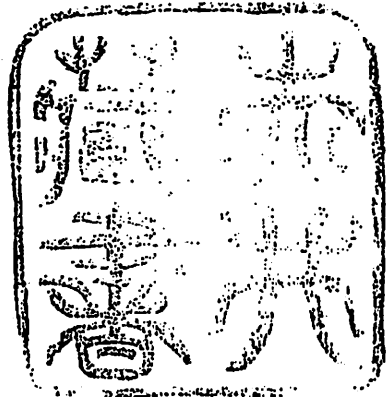
藤沢 ですから哲学の勉強をしようという場合に、学生諸君がいちばん具体的な問題として行きあたるのが、哲学史研究といえますか、実際問題として誰かをやるということですね。いま橋本さんの言われたような簡単に済ませよう、楽に済ませようという場合は別として、一応まじめに卒業論文なら卒業論文というものを書こうという



哲学を学ぶ人のために

藤沢令夫編

世界思想社



場合に、やはりある一人の哲学者とか、あるいはある一つの考えかたの系統というものと取り組まざるをえないということがあると思うのです。そうすると、第一、正攻法を取ろうとすると、どうしてもテキストを読まなければいけないということで、まず外国語の問題がありますね。それから時代の背景になっているもの、状況一般というものをどうしても知っておかなくてはならないわけだし、そこにある態度どうしても歴史的・文献学的な研究というものがはいつてくるわけなんですけれども、そうするとそれが、かなりたいへんな仕事になる場合が多いだろうと思うのです。そういう文献学的というか、哲学史的な研究というものと、哲学そのものといいますが、それをやることとがどういう内的な、本質的な関係にあるか、あるいはないかということ、今日はお話しただけだから思うわけです。

橋本 わたくしたちのときでも、カントにおける認識の問題とか、アリストテレスにおける実体のなるとかとか、大哲学者として公認されている哲学者の問題の神のなかで、重箱の底をほじくるようなことをしたものが、よく勉強したというか、ちゃんとした哲学の論文だというそういうムードが一方にあってですね、そしてたとえ

ばスポーツの哲学とかなんとかの哲学とか、そういうものをやると、つまり問題そのもので哲学をとらえるとなにかキワモノ扱いをするような感じがたがずとあつたと思うんですよ。だけど、はたしてアリストテレスにおけるこういうふうには、そのなかに細かくはいって、日本の哲学の学風がそれによかったのかという問題が一つあるでしょう。それよりもむしろはじめから、それぞれの学生なり当人の問題意識みたいなものをこちらにおいてね、それを大事にして、綱をパーッと打ってみる、……その二つのうちのどちらが哲学を本當に勉強するという場合にいいのか。わたくしはこのころは、やはり自分のことのほうを大事にしたほうがいいのではないかと思うようになっていきます。これは極端な例ですが、たとえばこんなこともありました。わたくしのところの哲学専攻の学生でね、それが野球部の部長なんです。練習ばかりさせられたあげくだから、哲学をするのの一体何をしたらよいかわからないといっています。わたくしは、せっかく野球をしているんだつたらスポーツの哲学というものでもやってみたらどうだと言うんです。そう言ってみるとやっとならぬと教わられたような顔をしまし

てね。そして、助言次第ではなんとかやってみよう……。

藤沢 ただね、橋本さんはいま、特定の公認の哲学者の研究を選ぶか、それともその当人のもっている問題意識を中心にしたテーマを選ぶかという分けかたをされたけれども、ぼくは、これは当人の心構えや態度のいかんによって、解消されることもありうる分けかたという気もする。後者みたいなしかなかったでやるとしても扱いかたによっていくらでも、「公認の哲学者」の中心思想に踏みこんで行くことができる。スポーツの哲学だって、もっていきようによっては……。

橋本 だから綱をひろげなきゃならんわけですよ、哲学史のうえへね。ところがですね、アリストテレスならアリストテレスという、これは偉い哲学者であると思っ

てもね、そのなかで問題を扱すわけでしょう、普通の場合は。アリストテレスにおける実体についてとかなんとかについてとかいうように無理やりに問題を扱してね。とくに西洋哲学というものは、ある概念の世界を構築してしまっているということがあるわけですね。独立した概念の世界になっているわけでしょう。ギリシアから現在のところまでが。

藤沢 概念の世界が構築されているというのは、つまり固定されたかたちで？

橋本 固定されたというより、どうにもならない客観性をもっていると思うんです。哲学史の世界というのはね。哲学あるいは哲学史の世界というのは、さっき言ったこととちょっと接触するけれども、思いつきでどうにもならんような固いものになっていてですね、まあ自分の主観でカントをどうしようと思つたって、カントの一つの概念の世界というものがあつて、それからまたカントにいったい金魚のフンみたいな、こう解釈者なり弟子なりがいっぱいおつてですね、それでまたカントの哲学の世界というものをつくっているでしょう。またそのカントというのはどうしてそうなったかというところ、ヴァルフがおりました、ライフニッツがおりましたとか、そしてまたそれで世界をつくっちゃってね。それをスラッと並べると、思いつきで手っ取り早く大学に二年三年でどうにもならんような固い固い世界になっていると思うんですよ。

藤沢 そういう面は確かにあると思うし、そしてまたそういう感じを受けるだろうと思えますがね。そういうことと、それから自分自身が哲学をやっているというモチーフ、これは誰でも最初持っていると思えますが、それとの関係はどういうふうに考えたらいいのでしょうか。

か、高田先生。

高田 そうですね、話は学士論文のテーマの選びかたというところから出発したようですが、この場合を考えると、学生諸君は、まずことばから、つまり外国語からやらなきゃならん、古典語からやらなきゃならんというふうなことがあるでしょう。やはり、大学へは行ってドイツ語をはじめるとか、ギリシア語をはじめるとか、そういうことがあるわけでしょう。こうした条件の制約のなかで、いきなり、いまのスポーンズの哲学とか、それから……。

橋本 遊びの哲学とか、セックスの哲学とかね……。

つまり何々の哲学というときの哲学と、カント哲学というときの哲学とはちがうわけですね。今までだとカント哲学という式のをやらないと哲学にはならないんだというムードがあったということですね。その面から言えば、やはりいま自分が恋愛で悩んでいれば、恋愛の哲学ということと、それを今までの哲学の歴史のなかへ網を広げてみて、人類が、とくにそのなかのいちばんのエリートであるとされてきているような哲学者が、昔からどういうように自分自身この問題を処理してきたかということとをずーっと見てみるというこのほうが、カント

におけるなんとかということをしているよりもいいんじゃないか。これが一つのテーマです。それとですね、次には逆に、哲学、とくに西洋哲学というのは固い世界をつくっていて、一年や二年の年間でよくわかりましたというふうな、そういうやさしいものではないんだということがある。その両方をならまなければ困る、とまあわたくしが今まで言っていたのはそれだけのことなんですかね。

#### 哲学のためのトレーニング

高田 よくわかりました。そうした二つのいわば異質的な要求、一つはつまり、橋本さんのいわゆる固く構築された観念の世界には入り込んでそのなかからものを考えていかなければならないという要求と、もう一つは、自分自身の哲学に志した本来の動機、それは多くの場合漠然たるものでしょうが、ともかくもそうした動機をあくまで大切にしていこうという要求、この二つの要求を短時日の学生生活の間で、どう調和させていくかという、まあ一応そういうところから話がはじまっていると思うのですが、しかしですね。ものごとにはですよ、順

序というものがありませんか。大学にはいって、哲学を専攻する場合、自分はあるこういう問題に関心があるからこれをやりたいといってもですね、さてこれを哲学的に処理するということになるとその用意はなにも持たない、というのであっては、いくらこれに集中し専念してものにしたいと思ってもやりようがないわけですね。そこにはやはりそのための用意、自分自身の哲学を開始するためのトレーニング、そういうものとして一種のいわば、文字どおりの意味でのスコラ的(『学校の』)な訓練——そういう伝統はどここの国の大学にもあるわけですが——これが必要になってくるのではないでしょうか。そしてそこでは、これまた中世以来の大学の伝統であるプリスクライブド・ブックス(Prescribed books)の概念ということ、そうした書物のリストは時代によってもちろん変わってきますが、これが大学での哲学の教育のやはり中心にならなくてはならないのではないのでしょうか。

だいたい、ぼくは日本では論文を書かせるのが早すぎると思うのです。卒業論文、というものが、つまり学士論文ですね、この程度の研究歴で論文を書かせる固ってどこにもないのではないですか。そこにはどうしても無理

がある。あまり早くからスケールの小さい「専門家」はつくろうとしないほうがいいのではないか。やはり学士課程ではできるだけ広くプリスクライブド・ブックス(Prescribed books)といったものを読ませること、また読むこと、そういう基礎的な訓練をじっくりやらなくてはいけないのではないか。しかしやはり、そうしたやりかたに対しては、反発を感じる人も相当多いと思う。自分がやろうとしているのはなにもそんなことじゃないんだというふうなね。その場合もしかし、反発のしかたにいろいろあると思います。興味がなからといってこれを捨て去るといふ態度もあるでしょうし、おおげさに言えばこれと対決してやろうという心意気で受けて立つというのも一つの態度でしょう。正道はやはり、基礎訓練をおろそかにしないというところにあるのではないか。そのためには年期をかけなくてはならず、その間創造的な意欲や能力を枯渇させないことがまた必要だ。そのところの兼ね合いが大変むずかしく、またそれがここに提出されている基本的な問題にもつながっていると思えますね。「スコラ的」などと言うと、すぐ悪いものときめてかかる価値があるけれども、日本の教育のやりかたというのも、少なくともこれまではそういうふうな方向に、一

歩一歩前進してきたと思うんですよ。だからこそ、哲学の勉強というのは同時にまた哲学史の勉強なのだ。思った、そういう恰好で、哲学と哲学史を並行してやってきたわけでしょう。いわゆる哲学概論の講義だって、これ自身やはり内容的に言えばリァレンジ (rearrange) された哲学史と言えるような場合も多いのであって、哲学史的な学殖をまったく抜きにした「哲学概論」なるものはありえない。その意味から言えば哲学の訓練というのはだいたい哲学史的な訓練ではないかと、そういうふうに思うんですがね。だからこれだけの哲学史的な勉強によってエネルギーが萎縮してしまう、自分の本然というものがどこかへ行ってしまおう、せっかく面白い着想がかりにあったとしても、そのなかに消えてしまおう、というようなことでは、これはやはり問題にならないわけでしょう。やはり問題意識が非常に強く、同時にそういうカリキュラムのなかで自分を見失わないで、あるいはむしろそれをより豊富なものにしていくというそれだけの自分の持ちぬしだったら、やはりそういう訓練なしにやるよりも、はるかに立派なものができていくのではないかと。そういう訓練のニグレットされている、ないしはそういう訓練の意義を悟らせることのできない哲学の教育とい

うものは、やはり失敗だと思えますね。そうした訓練のできる場所としては大学のほかにはないのだから。  
橋本 そこにはですね、やはりしかし、もう一つ、こうした問題がありはしないですか。昔ですと教師を哲学者、哲人とみていて、その人のおっしゃることはいいことなんだと、学生なり若い人はある程度無条件に受け入れて、お前はカントをやれといわれればそのとおりやったわけですね。カントをやってもちっともおもしろくもなければ、なにが問題なのかも見当がつかないのだけれど、とにかく自分の尊敬する哲人が、哲学者が、ここには宝物があるんだということを買って下さったのでなんとか宝探しをしようと思つて辛抱したわけですね。ところがこのころでは、「先生よくそんなことを辛抱されましたね」「有るや無いやわからない宝物を何年もかけて、カント全集をあちこち鶴の目鷹の目で捜しまわるといふような、そんな無意味なことよくされましたね、ぼくらは絶対そんなことできません」と学生から言われるわけです。そのもとのところには哲学者である教師、あるいは教師である哲学者に対する、哲学の求道のうえでの先聲・後聲といった意識が、ものすごくむずかしくなつてきているということがあると思うんですね。はじめにも

う尊敬してかかれればあとは辛抱して、のちにこうではないはずだったということになるかわかんけれど、しかしやはりライフニッツを一生懸命読んでみるとか、そういうことをしたものですけれどね。ところがですね、今では、自分が手っ取り早く認めてみて、いくらか実存的な、胸にふれるようなことが一行でも二行でも書いてあれば——駅本を腕んですね——それでそこへもうパッと行ってしまおうというわけで、先生のおっしゃった辛抱して、スコラ的なトレーニングを我慢してみろということがなくなっているわけです。そこにはですね、やっぱり哲学というのには、学問としてですね、学んだだけでは学に納まりきらぬところがあるという、いかに生きるべきかということの手っ取り早いセッションをくれるものが哲学だといった、そういうことが一方であるでしょう。先生のおっしゃっていることはばくもそれに賛成なんですけれど、さっき言ったことばだと固い世界がつかられていてですね、そこへ梯子をかけてのぼろうと思つと一段一段しんどい思いをしながらのぼっていかなくてははいれない、そういう部屋なり世界なのだということ、それをどうしようようにして納得させるかということに問題があるんですね。

藤沢 橋本さん自身も、やはり哲人であるあなたの先生からここに宝があるからこれをやれと言われて、まじめに一生懸命それをやられたわけですね。

橋本 それは藤沢さんもそうでしょう。  
藤沢 まあね。それで橋本さんは、あなたが言われたように、それをやった結果どうであったかということや学生などから問われた場合に、自分がやったことはよかったですんだというふうに答えられますか。それとも……。

橋本 いや、わたくしはそう答えていますね。キワモノをやらなくて、定評のある古典をやらなかったら哲学の世界へはいれないんだぞ、ということを強調しているんですね。

藤沢 強調しながら、しかしなにか片方で切り切れないものを感じるというわけなのですね。

橋本 ええ、そうなんです。

アメリカ式とヨーロッパ式

橋本 ところで、さっきの哲学のトレーニングの問題ですが、高田先生は昔いろんな方面のソース・ブックス (source books) というのを揃えようとなさったことがあ

ったでしょう。そういうものが今の大学の授業には欠けているという意味のことをさきほど先生はおっしゃったように思うのですが。

高田 いや「ソース・ブックス」というやつとわたくしの買った「プリスタライブド・ブックス」というのは大分話がちがいますよ。「ソース・ブックス」はアメリカの産ですが、「プリスタライブド・ブックス」を購するのはだいたいヨーロッパ的というのか、とくにイギリスの古い大学の行きかたで、こういうものを読めと指定されていて、それについてチュートリアル(tutorials)の訓練を受けたりえ、試験を課せられるという、これが「プリスタライブド・ブックス」です。

橋本 それはダイジェストじゃない……。

高田 ええ、ダイジェストじゃなくてね。……「ソース・ブックス」だってダイジェストじゃなく、抜粋です。それをうまく編集してね、一冊の書物で、たとえば天文学なら天文学の歴史とかあるいは倫理学の歴史や日本思想史・中国思想史といったものだいたい直接の資料を通じて勉強できるようにしている。それにイントロダクションや個々の資料の解説もつけていると、そういう恰好の本ですよ。西洋哲学の場合にはなかなかそういう

んなふうにしてもっと完全なものにしていくかということと同時に、これをどのようにうまく使っていくかというところにあると思えますね。

それに比べて、やはりヨーロッパ的というか、イギリスのとくに古い大学の伝統的な行きかたはだいたいおぼろげがちがうように思う。原典主義というか、オリジナルのことばで読むことが要求される。たとえばですね、オクスフォードではプリスタレスの「エティカ(倫理学)」というふうなものは、たんに哲学をやるとか、古典をやるとかという人間だけじゃなしに、みんなに読ませべきだというわけだね、それも翻訳ではなしに、直接ギリシアの原典で、何巻までとか、何巻と何巻というように指定して、プリリミナリー(予備)の試験のための「プリスタライブド・ブック」になっていました。だから非常に高いトレーニングを予想しているわけですね。いわゆる *high level of reading* (ギリシア語を知らない学生たち)もふえてくるし、だんだんそういうことができなくなってきたというのが実情でしょうけれど。

橋本 先生、それがなぜできなかったかというそのことが問題だと思うんですよ。

高田 そうですね、その原因がどこにあるかが確かに

単にはいかないようですがね。だからこれ、全部英語に訳して与えられているものでね、つまり、外国語なんか知らなくとも、いい先生さえいてうまくこれを使えばえすれば、やはり十分できるようになっている。この場合でも、直接資料も含めて、全部が自国語、つまり英語で読めるということは重要なことだと思えますね。同時にしかしアメリカには例のグレート・ブックス (*great books*) というやつね、ああいうシステムがあつてですね、まるっばのものを一気に読ませる、わかってもわからなくてもいいから——というのは言いきかもしれないが——ともかくこれを適当に教室で使用して、大事な書物を短時間の間にワッと読ましてしまおう。できるだけ早く若い時代に視野を広くするというのが目的ですが、そのためには外国語だとかなんだとかそんな面倒くさいことは言わない。これは哲学の場合だけでなく、文学でも歴史でもそうなんです、こうしたいいろいろな広い領域にわたって西洋の古典的な、どうしてもこれだけは読んでおいたほうがいいというような書物のまるっば英訳したものを集めて、例のシカゴ大学でやったそういう名前の叢書が出ていますね。日本でもだんだんこの種のものが出るようになってきたから、これからの課題は、これをど

問題だとわたくしも思います。ところでこうした行きかたをアメリカの教育ではですね、迂遠だ、ばかばかしい、そんなことをしていたら読めるのはほんの僅かじゃないかというわけで、そんなことよりも英語でザッと読んだほうがいいじゃないか、どこにちがいがあるかというわけなんです。教師さえちゃんとしておれば、そういうものを原典なんかで読んで苦勞しなくても読めるじゃないか、そういうことから「グレート・ブックス」というシステムが始まったと思うんです。「ソース・ブックス」もやはり、それをさらにもっと広い範囲に資料を求めて、これを系統だてて圧縮する、そういうふうな恰好でつくられたものだと言えるのではないでしょう。アメリカとヨーロッパとは、その点、非常にちがうわけですね。もともとアメリカでも、むしろそういうものを使える教師が必要だし、また立派な翻訳が広い範囲にわたってできているということがそういう集大成を可能にするための条件でしょう。アメリカの場合だと、同じ英語だから、イギリスでよい翻訳ができていたらそれも使えるし、自分の国でやったものも使えるというわけで、非常に高いレベルのものが広く与えられている。この点、たいへん有利な条件に恵まれていたわけですね。

橋本 アメリカとイギリスの哲学に対する姿勢のちがいに關係があるようです。

共通の認識

高田 そう言えるかもしれないが、しかしある意味ではどちらも、共通した認識の地盤に立っているのではないでしょう。古いもの、つまりギリシアという重要な時代からはじめて、ずいっと、中世をも含む重点的なものではどれをオミットすることもなしに現代にいたるまでのほんとうに古典と言えような、つまりグレート・ブックスと言えようなものを網羅してこれを尊重するといった態度がアメリカの教育にも見えるわけですからね。その点、だからやはり、基礎にある認識というものは、これは同じものじゃないかと思うのです。

橋本 いやわたくしの言うのはですね、気風がちがうというものが、こういうことで出てくるのではないかと思うんです。つまりヨーロッパあるいはイギリスの哲学者気質ですとね、やっぱりオリジナルで読んでいなければ、知らなければ、それについてもを言っていないかんとぞという、そういう専門家を非常に大事にするという、

つまりですね、哲学をやると言ったって、古典的なものを勉強しなければ少なくとも大学で訓練を受けた人間と音うわけにはいかないのではないか。やはりプラトーン—アリストテレスといった時分からこれまでのすぐれた哲学者の考えというものを踏まえて、大きく言えばそれに対決することによって徐々に自分を養っていくということですね。哲学の勉強というものはやはりそういうことが必要だというふうな面があると思えますね。そして、こうした必要性の認識は、ヨーロッパにもアメリカにもどちらにもある。やはりヨーロッパとかアメリカとかいう区別を超えて西洋の古くからの、ギリシアに由来する伝統、つまりプラトーン以来、とくにアリストテレス以来の伝統じゃないか、と思うんです。それがいちばんはっきり出ているのはプラトーンに対するアリストテレスの關係ではないでしょうか。やはり歴史を、先人の業績を踏まえたうえでのクリエーション(Creation)というものにこそ期待がかけられる。そうでなくてはほんとうの意味でのクリエーションというものは行なわれようがないということですね。それが基本的に一貫してあるんじゃないかと思うんです。

それで話をいちばん最初の橋本君の発言にもどして、

それがあつてしょう。ところがアメリカのほうは、古典語なんか知らない哲学者でもですね、おめず臆せずプラトーンはとか、トマスはとかいうことを言って、それで自分の哲学の道具に昔の哲学者を使うわけです。オリジナルで読んでなければその専門家ではないんだという意識ですと、なにか哲学史そのものが目的になって、それと自分を結びつけるということがどうも薄くなる面があるんじゃないかという気がするんです。

高田 あまり今のアメリカ式とかヨーロッパ式・イギリス式だとかいう区別を断定的に固定化してこれに固執するものかどうかと思いますが、例の「グレート・ブックス」というシステムですね、これはアメリカの大学の学士課程の、つまり一般教育の話ですわね。専門教育がこれでこと足れりというわけじゃない。だからして、一般教育用に自国語でというのと、厳密に古典的な原語でというのでは、橋本さんの言われたような両者の姿勢に相違があるにしてもですね、そこにはやはり、古典の尊重という両者に共通的なものがある。両者の相違の面に注目する前にこうした両者共通の面を強調しなくてはならないのではないか、というのがわたくしの言いたかったことなんです。

日本の場合はどうかという反省ですが、あなたのおふれておられたような行きかた、つまり、もしほくの誤解でなければ、歴史の勉強ぬきに哲学しようといった行きかた、これはかりにアメリカ式、ヨーロッパ式というふうな言いかたをした場合、このどちらでもないということじゃないかと思うんです。それ以外に、一つの奇蹟みたいな方法がありうるか。今までの歴史を無視してやってゆく、そうした態度でいくら「思索」というやつを重ねていても、それでもって究極的に、非常に独創的で高度な、しかも現代という時代に即応した新しいことが言えるようになる可能性があるか、ということなんです。こうしたわれわれの要求は、だから、日本の場合、外国語の問題などともからんで、法外なものだと学生諸君の目に映るでしょうけれど……。

体系性ということ

橋本 このへんでちょっと、問題へのアプローチを変えたいんですが、哲学と哲学史と言うときに、哲学というのはそれをやる本人にとつては絶対性を持っているでしょう。まあ学問なんだから批判を受けてつくりなおし

ていかなくしてはならないけれど、ぬきさしならぬ——科学をやっているというのところがね、科学の場合だとその本人にとっては自分の人格とは全く別のものを一種の技術としてやっているのだからいいのだけれど、哲学というのはですね、おまえの哲学はまちがっていると言われても、一生懸命やっているその本人にとっては、たとえそれが暗殺とかあるいは切腹とかいう行動にまで自分を追いつめていく、そういうのであってもしょうがないというふうなところがあるでしょう。だけど哲学史というのは、誰かが誤謬の歴史であると言ったことがあるように、いわば相対化された世界ですね。断固として哲学史を、古典を学ばなきゃいかんぞと言いつつながら、はたしてトマスにいれあげて一生を捧げるのじゃないかと……高田先生のことを言っているんじゃないんですよ(笑)。例が悪かったなア(笑)。なにかそういう不安がなきにしもあらずなんですよ。

それとですね、わたくしはいつも言っていることなんです、一般の哲学史のなかに登場する、昔から公認された哲学者と、オソドククスの新哲学史のなかへ出てこないような、出てきても一号下げて眺みたいなかたちでいられる哲学者と、なんか知らぬ間に二つに分けられ

ているでしょう。たとえばさっきのニーチェとかケルケゴールとか、あるいはパスカルとかね。こういうひとは大思想家だとみんな思っているんだけど、大哲学者だと公認されて西洋哲学史のなかの一つの峰とされているというわけではないでしょう。ですから、パスカルと、まあデカルトと比べてですね、どうしてデカルトのほうが哲学者で、パスカルが特異な宗教的思想家であつて、哲学者ではないんだという区別をするかというところ、およびその万般の問題について自分なりの答えを全体的に出そうと努力しているのが哲学者でしょう。だからある問題については大変鋭利なナイフを持っていたというのが哲学者じゃなくてね、自然をどう切るかといえば、おれはこう切る、恋愛をどう切るかといえば、おれはこう切る、政治はどうするんだとか、どんな問題を持ってこられても、武器を用意しているというのが哲学者のわけでしょう。

藤沢さんがどうしてプラトンなり、アリストテレスにこれあげて、一生を捧げにふっているかと言え(笑)、プラトンやアリストテレスだと、現在の問題、たとえば公書という問題が出されたらとすると、藤沢さんは公書についてというのを得けるわけだ。ところが、ニーチェ

だとあるところは切れる、ニーチェを刀にして政治についてのある局面を突いていけば料理が手きわよくできるというところがあるわけでしょう。女性問題でもニーチェで切れるところがあるわけですよ。だけど哲学がいちばん問題にきてきている存在とか自然というのをニーチェでどう切るかといえ、もう切れないわけですよ。

藤沢 そうですかね。

橋本 ええ、切れませんが、切れないとしましょうよ(笑)。ケルケゴールが自然についてどうしたというふうなことは、まあないとしましょうよ。

藤沢 はい。

橋本 してみるとやっぱり、古典的な哲学者を勉強しろと言うのは、かえっていちばん手っ取り早い道になるんだということがあるということになると思うんです。

藤沢 手っ取り早い、というのは問題だと思っただけで……。その前に、さっきの話にもどると、公書の問題でも恋愛の問題でもなんでもいいでしょうけれど、それを感想文を書くようなやりかたで扱うとか、あるいは評論を書くようなやりかたで扱うとか、そういうのに対して片一方で、哲学的な取り扱いというものが、確固と

してやはりあると思う。ところが哲学ということばはもとに日本の場合に、その両方にまたがっても十分通用するような曖昧な使われかたがされているということが一つあるということ、さっきちょっと思いました。

橋本 それはそうですね。それはぼくもかねがね強く思っている……。

藤沢 もし哲学ということばをきちんととらえるとしたら、やっぱり高田先生がさっき言われたように、哲学の方法、哲学としての問題に対してのアプローチのしかたといった場合に、これ以外にいったい何があるかと、問い返すことができるような確実な何ものかがやっぱり客観的にあるという気がするのですがね。

橋本 それはですね、ぼくはやはり「哲学」という日本語も悪いと思うんですよ。哲人ということばだと、これは普通にあってわけでしょう。それが哲学者と言いつつ、哲学と言いつつ、「哲学」の学の方へ力点がいかなくて、哲というわけのわからないことばの方へ力点がいつてしまっている。もし最初のころのように「理学」とかなんとか言っておれば、その場合は、あなたが、あるいは高田先生がおっしゃった、これよりほかにしかたがないじゃないかという、きついトレーニングが要するんだと

いうそういう意識も、あるいはもつと機子が変わっていたかもしれないんだけど。明治の西周とか津田真道とかね、最初に西洋哲学を知ったひとはそういうことを、つまり今までの儒教とか仏教とかとちがう、こういう論理性とか体系性というものを持った思想がヨーロッパにはあるんだということ、驚いて目を覚ましたわけですからね。ところが、いかんせん西周が「哲学」という訳語を採用したので、われわれが遺憾に思っているような「哲学」ということばのもつ曖昧さという、そういうことが日本で特殊事情として起きたのではないでしょう。

藤沢 そうですね。それとも一つは、フィロソフィアの本来の訳語である「希哲学」なり「希賢学」なりの希がとれてしまったので、哲学ということばはそれだけだと字義どおりの意味を持ちえないという、これはほくは前にも書いたんですが、そういうことがあってよけいに曖昧になるわけでしょうね。

橋本 そうですね。さっき藤沢君が言ったようにね、評論というものと哲学とが同じ一つの問題をとらえるにしてもですよ、どこがちがうかと言えば、わたくしはやはり体系を持っているかどうかということが、哲学が学問であることの根拠になると思うんだ。さきほどの、ど

の問題でも対処できるんだということね。セックスにしろ競馬にしろ、問題はなんでもいいですが、それが自分の全観念の体系のなかに論理的な脈絡を持って、ここにこういうかたちで位置しているんだという、そういうとらえかたをすれば、セックスみたいなものでも哲学の問題になるわけですね。

藤沢 それは確かに、体系を持っているかいないかという、そういうことばで言っているかと思いますが。ただですね、体系を持っていると言った場合、それでは中身はどういうことかということになると、そこに歴史の問題がはいってくるんじゃないでしょうか。

橋本 そうそう。

藤沢 ただ、体系というのはわれわれが普通考えるようなかたちの体系だけであるんじゃないかと、体系そのものを持とうとしたら、やっぱり哲学の歴史というものがあって、そこでこそ非常に本質的なかかわりあいを持ってくるんじゃないかと思うんです。

橋本 歴史だから時間の興行というものがある。そういう興行を見れば、カントの哲学というのもちろんとタレスなんかの体系にまでつながってゆく……。

藤沢 つまりですね、人間が世界を理解しようとした

ときに、人間と世界とのかかわりあいにおいてことばのシステムができて、そういうことばのシステムが、明確なまたは特殊なと言ってもいいですけど、そういうかたちでもって次々と継承されてきたというところに体系というものの根拠がある。だから全部つながるわけですね。

橋本 それはもう、哲学と言うとき、人間の万般の問題を、つまり人間が地球のうえで、宇宙のなかで、生きていくうえにどうしても求めなければならぬような観念の全部をどう見取図で置いているかということ、そこに哲学というものがあられるわけでしょう。だから、もしですね、哲学史という場合にただ、カントの前にはヴォルフがおります、ライプニッツがおります、そのライプニッツの前にはデカルトがおりますというふうな、こうしてうしろへうしろへと行くのでは、問題史的な哲学史と言っているのか、つまり観念は全部歴史的な積みかさねだからということ観念のところだけをスライッとたどるような哲学史になるでしょうが、それとですね、また藤沢さんも書いておられるように、それぞれの哲学は歴史的な一回性でなり立つところがあって、哲学がみんなそれぞれの絶対性を持っているわけですね。

そのとき、カントがいたドイツの、あるいはヨーロッパの社会的な状況というものと、カントの哲学そのものの関連をですね、それをとらえるのが哲学史なんだという、そういう二つの哲学史のタイプがあるでしょう。そのときさっきの話に出たようなやりかたですと、カントが十八世紀のああいドイツの辺境に生きて、あるいは近世の新しい自然観の問題といったものをつきつけられて、必きさしならずつくった哲学の社会性というか、社会的な背景というか、そういうものが落ちてしまうんじゃないかという……。先生は、それ以外にやりかたはないじゃないかとおっしゃったんですね……。

たとえば、ヴァインデルバンドの哲学史の教科書などがそうですが、ヘーゲルの哲学史でもね、哲学即哲学史といったときは観念の必然的なつながりというものが哲学史であり、それが即、イコール哲学だと……。これだよね、なにか下部構造とかなんとか、ことばはどうでもいいですけども、一人一人の哲学者がどうしてこういうことを、自分の哲学にしたのかということか、どうも哲学を勉強する場合に落ちてしまうのではないかという気がする。

高田 ぼくはヘーゲルの哲学史のようなものを理想に



おいてものを言っているわけではないし、観念の構築の歴史をたどっていくだけが哲学史家の仕事だとも思っておりません。

橋本 ええそれは……。ただですね、確かにこれは哲学というものの持っている宿命というか、他の学問とちがう独特の、それをよしとして哲学をみんなやってきたわけですけども、学問になりきらない面があってですね、セオリー(理論)とドクトリン(教説)ということばで区別をすれば、哲学はセオリーにならなくてはならないのだけれど、単なるセオリーだったら科学になるわけですからね。やっぱりそれぞれ一人一人に、これはぬきさしならぬおれの哲学なんだというドクトリン的な面があるわけでしょう。それがつまり哲学の専門家になるうと思っていない学生とか、サラーマンなど一般の人々が哲学の本を読むときに考えている哲学ではないかと思われませんが、こうした面はやはり哲学にとって本質的に大事なものでないかと思うんですが。

#### ラッセルの哲学史。哲学と 哲学史研究の分業論

橋本 わたくしはね、読んでおもしろい哲学史という

と思う、というように書いてくれた哲学史のほうがおもしろい。つまりこういう学問性を逸脱した面のある哲学史のほうがおもしろい。なぜか。そこが大事な点だとぼくは思うのですよ。それと、ラッセルの哲学史ははじめに、自分の哲学史のユニークさは思想の先祖調べ、系譜をいうのではなく、社会的な背景とか、そのときの政治とその哲学者とのかかわりかたといったところに力点を置いているのがミソなんだと自負している。これはやはり大事なことだと思うんですがね。

高田 ラッセルの哲学史は特色があつて確かにおもしろいとおたくしも思いますね。橋本さんはそのおもしろさを分析して二点に要約されたが、第二の点は誰もその重要性を否定しないだろうし、わたくしも異論はない。しかし最初に言われたことのほうは、これはたいへんむづかしい問題を含んでいるように思うのですがね。つまりですね、哲学史というものをどう考えるか、哲学史の研究というものをどう見るかということ、これは哲学とは何かという問題とも関連しているところにある。むづかしさがある。で、最初にまず考えたいことは、哲学史と言へばこれは歴史であるということ、これですね。ぼくはその際、次のような考えかたも成り立つのじやな

のは、藤沢さんからみれば誤謬だらけだと思われるかも知れませんが、ラッセルの書いた「西洋哲学史」、これはやはりおもしろいですね。それははじめに断つてあるけれど、どうせ一人のすることだから、ライブニッツ以外はわたたくしはオリジナルは読んでいません、とね。だが、哲学がやはり哲学史をつくっているわけなんだから、哲学史のほうの専門家がそれぞれの専門の方面について論文を書く、それをまとめたものが哲学史だということではなくて、やはりラッセルならラッセル、ヘーゲルならヘーゲルという一人の思想家が哲学の全歴史を見渡して、自分なりのまとめかた、解釈のしかたをするのが哲学史の統一なのだということなんです。わたたくしはアリストテレスはオリジナルではもちろん読まないけれど、アリストテレスのなかでおもしろいのはこういうポイントだと思ふ、とこういうふうにきわめて独断的なことをやるでしょう。そのほうがつまりおもしろいわけですね。学問的・客観的に調べて、そしてアリストテレスの哲学はこうでしたと言ってくれるよりも、二十世紀のある時代の尊敬するに足る一人の思想家がですね、自分の見識でアリストテレスの思想のなかで今のわれわれに意味があり、大切なことは、わたたくしの独断ではこれとこれだ

いかと思うんです。哲学の勉強は実際問題として哲学史を離れては成り立たないわけけれども、そしてその逆もまた真だろけれど、ことがら自体から言えば、そしてとくに専門的な研究者の立場とかレベルからすれば、哲学するということと哲学史の研究ということとは、やはりちがった営みですね。ちょうど、ある大学の文学部の制度として、美学と美術史とを分離して、美学は哲学科に、美術史は史学科に、というふうに分属させている、ぼくはちょうどそれと同じような恰好で、哲学史は史学のほうでやったってちっともおかしくないようなそういう面がはつきりあると思う。だからして、そういう目で見れば、哲学史とか思想史とかいうものは歴史である以上、哲学的にどのくらい価値があるかというふうな評価は一応、せいぜい仮説にとどめておいて、場合によっては非常に手のかかる、そして哲学的には、ほかから見れば興味を持ってないような仕事であってもそれに飛びこんでゆく、やはりこういうことが出てくるわけですね。いわんや、だから、それが歴史的に非常に影響の多い思想家・哲学者となると、史家としては、それが非常に手のかかることではあつても、たとえばアリストテレスとは何者だ、プラトンは何者だと、虚心に究明してかか

らなくてはならない。それを自分の最初からの興味で切  
 ってしまうということではなしにですね、どうも附にお  
 ちないというところがあるとなると、あくまでもそれを  
 究明する、そして真相はこうなんだと、もちろん絶対的  
 な結論は出さないうちでも、それぞれの史家は自分な  
 りにやはり一つの結論めいたものを寄与しなくてはなら  
 ない……。

橋本 そうです、それを刀を持っているという言いか  
 たで言ったんです。

高田 ああ……そうでしたね。だから今の、プラトン  
 にしてもアリストテレスにしても、これに対する既成の  
 評価がどうであるにしてもですね、史家としてはそれと  
 は一応独立に、その歴史的真実 (truth) をつかまえた  
 いということがあつたわけですね。今の、哲学が真を求め  
 るというのとは少し意味がちがいますけれど、やはり歴史  
 的真理、そういうものに迫りたいという根源的な要求が  
 ある。だからたとえ古代末期から中世のはじめにかけ  
 てのあたりね、あのへんのところは実に複雑でむづかし  
 いし、それがまたその勢に値するかどうかかわらない。  
 しかしそれをやっているうちにですね、これまではそれ  
 ほどに思われていなかったひとが歴史的にはあつても、

ある。だから、哲学史を研究することは哲学者を志すひ  
 とにとつてもむしろ必要ではあるけれども、哲学をやる  
 人間がこうしたレベルで、哲学史家がやるのと同じこと  
 をみんなやらなきゃならんということだったら、これは  
 いくら命があつたって、とうていできっこない相談です  
 よ。ことに日本の現在の段階では一般に西洋哲学史の研  
 究というのはやはりだいたい遅れていますからね。だから  
 そんなことをやっていたら肝心のやりたいこともやれな  
 くて、日暮れて道遠して、ぼくみたいにならんだ(笑)。  
 だから、哲学者としての、あるいは哲学者たろうとする  
 そういう意図で出発したひとの場合であれば、これは一  
 つの挫折ですよ。しかしやはり一方からいえば、そうい  
 うようなことをじっくりやるひとなければ、哲学のほ  
 ろから言つても、ほんとうに世界的にみてキチンとした  
 ものができてくるということが望み難いんじゃないか。  
 西田(幾多郎)先生の場合なんか、やはりそういう哲学  
 史的なこと勉強を自分でやらなくてはならなかった。  
 「哲学」のほうはずっと前に出てしまつて、「哲学史」  
 が跛行してあとからついていったというかたぢですわね。  
 分業は、だから、ここでは不成功であつた……。

意外に重要な意味を持つてくる、といったことがあれば、  
 これは予期した目的でなかったという意味では副産物か  
 もしれないが、やっぱり非常に大きなアチーブメント  
 でしょうね。中世の再発見などということも、いとも簡  
 単に口にするひとがあるが、どうしてこれはたいへんな  
 仕事なんだ。第一、文献学という話も出ていましたが、  
 ここではテキストの構成という基本的な仕事が大筋にま  
 だ残されている。だからして、あらゆるマニエスクリプ  
 ト(手写本)を使って一つのテキストを構成していくと  
 いった仕事が非常にエネルギーを費して日本を含む各國  
 でなされているけれども、この仕事も要するに資料の整  
 備であつて、また史的研究の予備段階ですわね。その点  
 古代のものを扱う場合なんか比べて、労苦は多いにか  
 かわらず研究の成果は比較にならないほどまだ遅れ  
 ている。哲学をやる人間がそんなことで苦勞してはおれ  
 ませんよね。しかし、それに一生を捧げているひとはで  
 すね、はたしてそのために一生を捧げたということ  
 になるかどうか、それは問題だとしておいていただきた  
 い。

ぼくはですね、ここではつきり、分業だと思つてす  
 ます。哲学史家というものはやはり史家としての任務が

哲学史研究が見えるもの

橋本 さっきからのお話で、哲学史研究の仕事という  
 ものは協同作業だという点が確認されたようですね。ヘ  
 ーゲルにしてもあんな大きな哲学史を書くのに助手をす  
 ごくたくさん使っているに相違ない。そうでなければあ  
 んな仕事はできなかったでしょうからね。

高田 助手を使うにしたらつてそういうひとがいなけり  
 やだめですわね。そうしたことやれるひと、つまりそ  
 ういう縁の下力もちみたいなのをやるひとが必要  
 だ。藤沢君なんか不満かも知れないけれど、ぼくに言わ  
 せれば、哲学史家の固有の仕事は、哲学そのものの側か  
 ら言えは、しよせん縁の下力もちみたいものになる  
 と思ひますね。

橋本 ただその縁の下のことですわね。西洋哲  
 学史と書けば、一章、二章と出てくる哲学者の名前がほ  
 ぼ限定されているようになっているところへ、たとえば  
 さっきのお話の古代末期から中世初期の埋もれたガラク  
 タかもわからない文献があつて、あるいは埋もれた哲学  
 者がいて、それは埋もれたんだから後世に影響を与えな

かったんだけれど、そういうのを誰が発掘するかと言えば哲学史家が発掘するわけですね。そうすると哲学史というものには、一つの客観的な世界をつくりあげている面と、埋もれていたものを誰かが発掘することによって、それまでに築きあげられている概念の世界をゆるがすような、あるいは以後の哲学史の方向を変えさせることになるかもしれないという面があるわけですね。そして、そういうものを発掘するのが哲学史家の役割なのだ、そう考えていいのでしょうか。

高田 そういうこともありえないとは言いきれないでしょうが、まあおそらくはないでしょうね。それよりむしろ、哲学史上大きく特筆大書されているひともっている非常に重要な面を、歴史的な「真」の追求の結果として、新たに発見したりちがった角度から再確認したりする、そういうところにむしろ大きな意味がある……、ことに古い人物の場合のほうにそうした可能性が多いんじゃないでしょうか。

橋本 全体像がひっくりかえるようなアスペクトがあるわけですね。

高田 可能性として埋もれているアスペクトが、ぼくはまだいくつも残されていると思うんだ。いろんな細か

い研究がなされてもですね、なんかそういうふうなこれまでのアスペクトでやはり見ていて、それを裏つづけるためという格好でやられているのが多いように思われる。しかしですね、たとえばアリストテレスの場合で言うと、アリストテレスのある非常に興味深い面で、しかもそれを昔のひとがかなりの確にとらえているということがあるのに、それがあまり注意されないで、むしろ忘れ去られてしまっている……ちょっと複雑ですがね、そういうことだってあるわけですよ。

橋本 それはアペロエスとかのことですか。

高田 いいえ、ぼくの頭にあるのはトマスの場合なんです。トマスそのものが哲学史家から無視されてきた、そのためにですね、トマスのとらえたアリストテレス、もちろんこれが無比の立派な解釈だというわけではありませんが、しかしそこにはアリストテレスの教説の非常に重要な点についての的確な把握が確かに存在しており、意識的にそのうえに立って彼の仕事が進められているにかかわらず、これが無視されてきたという、そういうことがあると思うのです。ぼくの言おうとしているのは具体的には……まあどう言えはいいか……彼の方法論と言えような問題についてです。つまり、……あま

リクトドクド言うのはやめますが、アリストテレスの体系の叙述と言くと、普通まず、彼のいわゆるテオレーティックシユな領域から始めて、そのなかの第一哲学ないしは形而上学、数学、自然学、そして次に実践哲学の領域とすることで倫理学、政治学等々、そしてこれとは別格に倫理学というふうに使われるわけですが、そこに出ているいろいろの学問の分類というものがそれ自身、これをはじめてやったのはアリストテレスでしょう。そして彼の場合、その背景に、すべての学問というものはそれぞれちがった領域の対象を持っている、そしてそれに対応して、それぞれの対象領域に対する研究の態度が変ってこなければならぬ……。

橋本 さきほどの方法論ですね。

高田 方法論というのはまあそういう意味で言ったわけですね。そういう観点からすれば「ニコマコス倫理学」の第六巻などがたいへん重要な意味を持つてくるのですが、そこまではともかくとして、とりあえずまず、アリストテレスの学問論というものはたいへん貴重な教訓を含んでいると思うのです。最近なところへ引き戻していえば、こちらで偉いからあちらでも偉いだらうといったアナロジはなり立たないということなんで……。

橋本 たとえば数学で偉いから政治のほうでも偉いだらうということにはならぬということですね。

高田 それはまあ偶然に、そっちのほうにも天稟があるといった場合も多いでしょうがね。しかしそうしたことは今の問題ではないんでして、大切なことは、やっぱり専門家は専門家で、それぞれその領域に従って特別の修練が要るのだということね、これが、平凡なことのようだが、あらためて注意喚起することに値するところだと思っただけです。その点ですね、プラトンの場合と比較するとそのちがいが非常につきりしてくると思っただけです。さっきあなた（橋本）が言われたこととも関係があるんだが、プラトンではですね、少なくとも「国家」におけるかぎり、「善のイデア」をつかまえたらずべてがわかる……、つまり魔法の石なんですね……。

橋本 だけど、藤沢さんはそういうものを目指しているのでしょうか……。

高田 あなたもさっきそう言ったのでしよう。哲学者というものはなんにでも答えられなければいけないと……。

橋本 ああ、そうか。

高田 そういってプラトンの「善のイデア」の教えは、

わたくしに言わせれば、アリストテレスでも決して消えているわけではない。ただ、アリストテレスはそれを踏まえたうえで、「学問とは」ということを考えていると思うのです。トマスが神学というものを位置づける場合に、やはりこうしたアリストテレスの「学問論」「学問の方法論」といったものをその基礎にしているのですね。要約的にわたくしの言いたいことを言いますと、アリストテレスのそういう面がですね、トマスでははつきりつかまれていたにかかわらず、トマスはニグレクトするために脱落してしまふ、こういうことだってありえたのではないかと、ということなのです。

そこでさっきの語にもどして言えば、アスペクトということですが、同じプラトンにしても、同じアリストテレスにしてもですね、いろいろ新しいアスペクトから光をあてることによって、もしうまくそれが使われたら非常に豊かなものが出てくるのではないかと。そうしたものの価値とすることがあってこそその古典、古典を学べということなんだと思うんであって、ただ問題がこう展開してきて、だからこうなんだというのとはちょっと違うと思うんですよ。

橋本 近世でも、ライプニッツみたいな、公けにした

つまり、高田先生のお話に出ましたように、一部ではほとんど常識のように思われているプラトンにしてもアリストテレスにしても、いったいプラトンというのは何者なのであるか、アリストテレスとは何者か、というふうにして一生懸命これを追求する、そうした歴史研究をやっているうちにそこからまた思想的な発掘ということも出てくる。ということですね、つまり歴史というものはそれ自身、文字どおりヒストリア、すなわち探求だということなのでですね。ですから、まさに探求としての歴史というふうな歴史をとらえますと、ヒストリアというのはやはり哲学にはかならない。そこにこそ哲学の具体的な、われわれ自身の主体的な営みがあるのではないかと、という気がするわけです。そういうふうにして実際の活動としての探求のなかで行きあたった問題、それを追求するということかたちでの哲学というものと、他方、哲学史研究などというのはおれのやることじゃない、おれにはもつと緊急の問題があるんだというかたちで、哲学史研究を全然脇へ置いておいて出発している哲学とでは、どちらがいったいほんものの哲学であるかということをお問いただいわけなのです。ことにわれわれは具体的に日本に在るわけですから、日本の場合は、その分業説とい

のはなんというか、安全な哲学であってですね、危険な———というのかな———思想は、自分の本音のほうは、原稿でワットとつぶい残している、こんなふうな安全なものをおライプニッツの哲学だと、こう哲学史には載せてですね、言いたかったことは未だにハノーヴァーに埋もれているという、そういうケースもあるわけですから。確かに、だから、わたくしもそう思いますかね……。

#### 分業説補正

藤沢 そういうこともありまますから、高田先生がさっきおっしゃった哲学と哲学史の分業説に対して、今のお話の点も含めまして、基本的にはこれを承認しながら、ちよつとちがうことを言うことになるかもしれませんが、つまり、そういうふうに、哲学史というのは一種の歴史研究である、哲学というものはそれはまた別個の営みである、こんなふうな風に説くことによつてこの「分業」というものを規定するということにそのことによつて、ぼくはまた他面において、ふたたび哲学史研究というものを哲学そのものにつなぐことになるのではないかと、いうふうに思うのです。

うことが誤解された場合、非常に危険なことになるんじゃないかということですね。

そういうわけで、さっき橋本さんが出されたラッセルの哲学史についても、同じことがいえると思うのですけれど……。たしかにラッセルの哲学史には、ラッセルの哲学史としてのメリットがある。読んでおもしろいというの自分なりに問題を触発されるからですね。

橋本 問題意識にふれるわけですね。

藤沢 触発されるんだけれども、他面において、わたくしらが読んでみましても、哲学そのものにとつて非常に重要なと思われるいくつかの問題がそこでは消えてしまっているということも、事実であるわけです。それで両方を比較した場合、つまり、そういうふうにラッセルに教えられた問題と、他面そこで消えてしまっている問題を比較して、どちらが重要かということを考えてみますと、ラッセルに教えられ触発されて問題意識が喚起されるということは、結局はラッセルの眼でもってものを見るということになりますね。確かに、おもしろい、これは哲学的に興味があると思うかもしれないけれど……。ということは、やはりいちばん基本的には、結局ラッセルのなかにとらわれてラッセルに帰るといふこと

ではないか。他方において、わたくしも素人のうちでなければ、プラトンならプラトン、アリストテレスならアリストテレスというものを自分で直接読んで非常におもしろいと思つた問題が、さつき橋本さんの言われたラッセルの独断的なとりあつかいと視点のために完全に消えてしまつていゝるということがありますね。そちらのほうと、さつきのおもしろいといふことの意味するものと、そのどちらがほしいわれわれ自身の哲学にとつて大切なことなのかを考えたいわけです。

橋本 哲学史にとつてではなく、哲学にとつてですね。藤沢 哲学にとつてです。これもやっぱり、さきほどの話と同じように、われわれは具体的に日本のなかにいるわけですから、ここにはその独特の知的風土というものがあるわけで、哲学史研究といつても、さきほど高田先生が話に出されたように、だいがちがいますわね、土台になつていゝるものが……。だからわたくしとしてはむしろもういっぺん、哲学と哲学史研究とを分けるということは確かにそうだとすも、哲学史研究のほうをさきほど申しましたように歴史、つまり文字とありの「探求」といふふうにとらえた場合に出てくる哲学といふものと、哲学史的な研究を意識的に排除して行なわれる哲学とで

は、やはり前者のほうを今は大事にしたいという気持ちだと言いたいですね。

高田 藤沢さん、あのね、分業などという奇矯の言を弄したほうがこんなことを言うのはおかしいかも知れないけれど、哲学史の研究にはどうしてもそれを専門とするレベルの高い研究者の厚い層が必要だといふ感じをわたくしは強く持つ反面、だんだん専門化していった場合の哲学史研究の成果がはたしてどんな格好で「哲学」そのものをじつさい有効に養うことになるかといふこと、これをわたくしは見守つていきたい、といふか、見守つていってほしいという気持ちを持つのです。よその場合で言うと、古典研究の、とくにアリストテレス研究の牙城だったオクスフォードで、過去のアリストテレス研究と現在の分析哲学とが(オックスカムを繋通して)どういふ格好で手をつなぐかといった点に興味を持つのです。ぼくの本音は、やはりあなたの場合と同じように、哲学をやるひとにもう少し哲学史の勉強をしてもらいたい、と言つてつぎる。ただ、それと同時に、そうした勉強を可能にし容易にするための条件をつくり出すといふこと、これはわれわれ哲学史をやっている人間の任務じゃないか、とこんなふうにも思つてわけなんです。

もうだいが古い話になりますが、アメリカン・セミナーで、オールドリッチ氏が京都に来たことがありましたね、あのときに京都大学に案内して講義題目などを説明したとき、ギリシア語やラテン語のテキストを使って演習をやっていると聞いて、あれはなんだ、なんだってあんなおかしなことをやっていると言わんばかりなんですわ。彼自身そういうことをあんまりやっていませんわ、古典語なんかをね。ただ、自分は、例のグレート・ブックスでプラトンの「国家」を学生に教えたことがあるといふことは言つていました。オールドリッチ氏などの限から見れば、日本でわれわれのやつていゝることはまるでバカみたいに見えたらしいから、ぼくは説明して言つたのですが、われわれもむろんグレート・ブックスみたいなのが日本に存在することが大いに有意義だとは考へる、つまり日本で読ませるほうがいいといふこともあるかも知れない。しかし残念ながら、そうしたものがまだ生まれていない、われわれの仕事は、だから、まずそういうものを作るといふこと、あるいはむしろ、そういうものを作れる人間をつくることなんだ、そういう課題をわれわれは負つていゝるんだと、こんなふうに見守つておきました。彼はやはり怪訝そうな顔をしてい

たですがね。

橋本 ぼくはさつきアメリカ式の特徴と言つたとき、じつはそのオールドリッチ氏のことを頭にありましてね。分析哲学をやつていてですよ、ギリシア語もできんような学者が平気で、ブレイトリーはこうだとかそういうことを言つてね。しかしつまり、それは自分の血肉にしているわけでしょう。たとえまちがっているプラトンかも知れないが、英語で読んだそのプラトンでもって自分の思想を広げて大きくしているわけですね。それは大事なことでないかといふ印象を、つまり京大式の宝があるぞと言われて一生懸命やつていたその直後に、そういう学者が戦後すぐアメリカから来たわけですから、ものすごく印象にのこつていたわけですよ。おめず臆せず、ぼくもやっぱり、ギリシアのことでも藤沢になんでも言えばええんやない……。(笑)。

高田 それは、ぼくは、言うことが大いに必要だと思つていゝますね。

藤沢 ソリヤそのとおりですね。高田 藤沢君でなくても誰かがこうむつかしくかまえていゝる、ものを聞くのも仰られる、といふ空気が、もしもですよ、あるとしたら、ぼくはこいつは残念なんだ、

もっと自由な態度でザックパランに「イデアでなんや」てなことを言う人間がいること、そしてそれとじっくり話し合うということが大いにお互いにとって意味があるんじゃないかという気がするんですよ。

#### 哲学者と哲学史

橋本 さっきの、哲学史の研究者の層が厚くなくてはならぬという論といくらか鋭い遠いがあると思いますが、哲学史は哲学と緊密に結びついているところがあって、哲学者は自分の哲学史が書けなければならぬという一面がある。つまり専門家として多くのひとびとと協同してやらなければならぬ面と、哲学者であれば、あるところまで行けば、藤沢さんくらいになれば(笑)、哲学史を自分の眼でにらんで自分のところまで書けなければならぬという面とがあるでしょう。またそうした自分の眼でみた哲学史のほうが魅力があるといった……。

藤沢 だからですね、哲学者と哲学史家を区別してよく「彼は単なる文藝学者である」とか「単なる哲学史家である」とかいった言いかたがされることがありますね。それはたしかに、これまで話に出たような意味にお

いて「単なる哲学史家」でしかないようなひとがたくさんいるのは事実かもしれませんが、他方、単なる哲学史家にもなれない哲学者が哲学をやろうとするから話がややこしくなるのではないかとも思いますね。さっきラッセルの哲学史のことを言いましたが、この場合でも彼はライプニッツの原典を研究し、またギリソフ以来の哲学の歴史についてもかなりの程度の素養はむろん持っているわけですね。だから橋本さんの言うおもしろい哲学史が書けた。ところがわれわれのところではしばしば、今言うように、「単なる哲学史家」にもなれないひとが哲学をやろうとするからややこしくなるのではないかと……。

橋本 そういふ言いかたでもよいのかもしれませんが、わたくしは同じことを逆の方向から、哲学史が書けるのは偉い哲学者であると言いたい。わたくしの感じでは、偉い哲学者でなければ哲学史は書けないのだという、その面のほうが大事みたいなのが……。

高田 まったくそのとおりでしょうね。

橋本 つまり、哲学史を書くには哲学がなければ書けない。ただ歴史哲学を持っているということだけではなくてね、哲学全般を持っているというのではなくては書

けないと思いますね。

ところでですね、先生もさきほどアリストテレスの形式だと領域によって、問題によって、方法のちがいが、あるいはアスペクトの相違というものを常に意識しなければならぬと言われた、それはそのとおりでと思いますけれどね。しかし、アリストテレスのときの哲学という概念と、今の普通の意味での哲学というのではよほど変わってきた、いや変らせられてきたでしょう。「動物誌」みたいなものを哲学のなかに含めていた哲学のイメージと、そのなかから子供たちがみんな家出して「科学」として一人立ちしてしまっただけになった古家だけを守っているような感じになっている現代の哲学とですね。科学がみんな外へ出ていってしまったときの哲学という場合、これがまだライプニッツだと、神学ですか、その全部を支えるような、アスペクトがちがうんですけど——それを支える哲学というイメージがあったわけでしょうが、今のうちに、物理学と哲学とが同じ水平のところと、学問の一つのある特異なタイプにすぎないというそういう「哲学」になってくるとね、その哲学の歴史と書きたとき、つまりさきほど先生は哲学史は歴史の一分野というようにとられてもいいんだというふうにおっ

しゃっしましたけれども、そうすると、ある歴史を書くということとはやはり歴史哲学とか史観を持っているからでしょう。だから史観がないと書けないとしますとね、すると哲学史というものが今までの哲学史のように学説をパァーッと並べるだけではなくて、デカルトという思想家とそれとやはりそのなんらかの社会とかその当時の歴史とかにかかわる、そのかわりあいというものでとらえた、そういう哲学史というものも可能になってくるわけですね。そうしたものと、みんなして専門家的に緻密にやらなければならぬ哲学史というものとね、哲学史の概念もまた割れざるをえない。つまり哲学の概念が割れているのと同じように、哲学史もまたちがったものが出てくるんじゃないか。つまり歴史の一個域としての哲学史というものと、それと大学の哲学科のなかで西洋哲学史講座というもので教えている哲学史とで、中身が非常にちがったものになってくるのではないですか。

藤沢 それは……。

高田 おっしゃった最初の点ですがね、そこからまず出発すると、哲学概念というものが哲学との関係でだんだん変わってきている、これは一応そのとおりでと思うんですよ。だけどやっぱり藤沢説のごとくですね、スター

トがギリシアにおかれてフィロソフィアと呼ばれることが出てきたもの、このものは本質的には変ってはいないと思うんですよ。さっきアリストテレスのことを言ったけれど、そこでいうフィロソフィアのソフィア(智)というものを、これをアリストテレスはかなりはっきりと規定している。「頭を具えた認識」だというのがそれですわね。これはやはり変らないのではないか。体系性だとか全体性だとか根源性だとか、そういうことをもって「哲学的」という態度の特色だと考える考えかたも、やはりその祖先をここに持っているのではないか。スポーツでもセックスでも哲学になるというのであれば、どうして「動物誌」が哲学にならないのか。……それに就いて思い出すのはアメリカのカウマン教授(Walter Kaufmann)のあのひとの「宗教と哲学の批判」(Critique of Religion and Philosophy 1956)という書物ですが、わたくしはあれをたいへん興味深く読みました。彼は現代の哲学の状況の分析から出発するが、その一方の極に実存主義を置いて、これはギリギリの主體的なアスピレーションを前提するものだという意味で、哲学というものの大切な一つの要因を代表すると考える一方、他の極に分析哲学を置いてこれも哲学に不可欠の要因を代

表すると考える。どちらも、しかし、一極に偏して他の極を容れえないものであるところに問題があるとしており、これが彼の「批判」の原理的立場になっている。これをギリシアにかえて言えば、哲学の歴史の出発点におけるソクラテスですね。ソクラテスの「無知の知」というのは、プラトンの「ソクラテスの弁明」のなかでも、やはりなにか非常に高いものを彼はつかまえている。つまり彼はソフォス(智者)なんだというふうに描かれているし、同じプラトンの「国家」の「善のイデア」の個所で、それをしかし、ドグマという恰好で出さないで、あくまでもそれに対する解明の努力、その論理的な裏づけ——非常に広い意味でのですよ——ということへの努力力というところに重点をおいて、プラトンの手法で美しく写されている。広い意味でのロコス、そうしたロコスを与える(ロモン・ティドナイ)ということへの少なくとも努力がなきゃね、これはやっぱり哲学じゃない。この二つのものをカウマン式にその両極というふうに言えば、どっちの要因を欠いても、そうした態度は哲学的じゃないと思うんですよ。主体性と言ってもそれは絶対性ということには必ずしもならないし、信仰とか信念は狂信であってはならないのだから。それを裏返して言

えばですね、こうした両面のバランスないしは緊張のうちにこそ哲学は成り立つ。だからですね、哲学というものは、いま言うような意味でね、やはりなんらかのウィッセンシャフトリヒカイト、つまり、そのすべての含蓄性・発展性を含めた意味でのロコス性というものを持たなくてはならない。哲学が宗教であるとか、文学・詩であるとか、あるいはそれの悪い場合で言えば単なる一家言であるとかにつきないためにはやはりそれがなけりやダメですね。

橋本 そうすると、なぜ哲学史を勉強しなければならぬか、とくに日本の哲学界の状況にかんがみると、なぜ哲学史を勉強しなければならないかという問いに対しては、先生のおっしゃったカウマンで言えば宗教とか実存とかそういうことでなくて、むしろあまりにもいわゆるアナリシスの面が軽んじられているから、そういう脚線のできる場所が哲学史なんだぞと言えばいいということになりますか。

藤沢 それともう一つ、高田先生。アリストテレスのその大きなメリットとして、彼は「方法」の区別をした、方法という面からは区別しているけれども、ソフィアとしての統一はやはり持っているということですね、そっ

ちのほうも大いに強調していただきたいわけなんですけれど。さっき橋本さんが、たとえばいろいろの自然科学・数学と哲学とが並べられている、哲学の概念が変っているとおっしゃったけれど、これもですね、さかのぼっていくと、アリストテレスのようなひとがいたり、その前にプラトンがいたりして、そこにおいてはソフィアとしての統一があった。だからアプローチのしかたはちがうけれども、プラトンが「善のイデア」と言っているときと、それからアリストテレスがそういうモチーフを踏まえたうえでなおかつ方法的に厳密に区別しようとする。具体的にはやりかたがちがうにしても、今日哲学と並べられているようなそういういろいろの学問がやはりソフィアとしての統一のなかに組み込まれているようなそういう哲学のありかたというものに行きあたるわけですね、さかのぼっていけば。そしてこの「さかのぼる」ということを、ただ歴史的な意味のことだけにとどめずに、まさにわれわれ自身の主体と状況の内における問題追求として行なうこと、これがやはり大事じゃないか。われわれとしては、やはりこういうふうにいるいろいろな学問が分化したら分化しただけですけどね、もともとと哲学が持っていた智(ソフィア)としての統一性とい

うことをモチーフとして大切にすべきではないか。そのために哲学史というものが一つの大きな、われわれにいろんなことを教えてくれる場ではないか。「動物誌」みたいなものでもすね、やはり哲学、フィロソフィアのかの一つの営みであった。今日いろいろの学問が分化していてもやはりポスターラインの領域でいろんな問題が起きてくるが、これも結局人間の知に対する欲求というところから起ってきたんだから、一挙にそうはいかないとしても、ことがらとしてはすね、やはりそこまで行かなくてはならぬ。人間が生きていくということが持っている統一というところに根があるかぎり、とこんなふうに思いますね。

橋本 哲学というものに対して今日どういうイメージが抱かれているかわからないけれど、哲学というものに対するなにか一般的な要求があるように思われる。哲学の復権というようなことが言われている面というのは、まさにそういうところにあるんじゃないか。それは大抵なことだと思えますよ。

それからすね、話の脈絡がつかないかも知れないですが、なぜ、自分で本を読まずに、哲学の本を読まずに、哲学史をやらないで、一人勝手に、いわゆる思索と体験と

いう、昔の哲学青年の言いつやないが、そういうしかたでやるよりは、哲学史をやったほうが本当は哲学をやるのに一番近い近道なんだ、王道なんだということをやドゥマイスするとしたら、やはり偉い哲学者というのは、そういう宝があるかないかわからんけれど、それが一応理解できるとすね、こんどはほかのことをやるときに……たとえばヘーゲルならヘーゲルをやって自分の心に満たなかつたとするでしょう。しかしヘーゲルの哲学というのが客観的にわかるとね、ほかのものをやるときの、ものさしにこれができるわけだ。藤沢さんが強いのは、プラトンをアリストテレスというものさしを持っていてからでね、だからたとえば分析哲学なら分析哲学というものをにわか勉強しても(笑)、そういうものさしをこれに当てて、これは十五センチのとこしかないとか……、そういうふうなことが言えるのはやはり哲学史、あるいは大哲学者を勉強したものの強みだと、こう言えはいいわけでしょう。

藤沢 いやどうも。——最後に高田先生、なにか補足されることもありましたら。

高田 そうすね、日本でもこのころではいろいろ古典のいい翻訳もできてきたし、哲学史の勉強も、先人た

ちの苦勞によつて、たいへんはいりやすくなつてきているという事実、これはやはり言っておく必要があるでしょうね。

藤沢 もはやそれほど恐るるに足るものではないと、……(笑)。

高田 まあ、そんなことを言えるほどでもないでしょうが……(笑)。



竹原治一郎

一九二六(昭和元)年、大阪市に生まれる。昭和二五年、京都大学文学部(哲学専攻)卒。現在、大阪教育大学助教授。主要論文、「論理実証主義」(現代哲学入門)第二巻、有信堂。『分析哲学と形而上学』(理想)昭和四六年一〇月号など。

中林 雄

一九三二(大正二一)年、東京に生まれる。昭和二四年、京都大学文学部哲学科(哲学専攻)卒。現在、関西大学文学部教授。主要著書「ハーゲル研究」(理想社)、「ハーゲル―理性と現実―」(中央公論社)、「ハーゲル」(ミネルヴァ書房)。

福永光司

一九一八(大正七)年、大分県に生まれる。昭和一七年、京都大学文学部(中国哲学専攻)卒。現在、京都大学教授。主要著書「荘子」内・外・雑篇(朝日新聞社)、「荘子」―古代中国の実存主義(中央公論社)、「老子」(朝日新聞社)など。

梶山雄一

一九二五(大正一四)年、静岡市に生まれる。昭和二三年、京都大学文学部(仏教哲学専攻)卒。現在、京都大学教授。主要著書「世界の名著」第二巻「大乗仏典」(共訳)(中央公論社)、「空の論理(中国V)(共著)(角川書店)など。

高田三郎

一九〇二(明治三五)年、大阪に生まれる。昭和二年、京都大学文学部哲学科(西洋古代中世哲学専攻)卒。現在、京都大学名誉教授、佛光大学学長。主要訳書トマス・アクイナス「神学大全」(創文社)、「アリストテレス」ニコマコス倫理学(岩波文庫)など。

橋本雄雄

一九二四(大正一三)年、徳島県に生まれる。昭和二三年、京都大学文学部(哲学専攻)卒。現在、神戸大学教授・常光院(京都)住職。主要著書「宗教以前」(日本放送出版協会)、「清沢澗之・鈴木大拙」(中央公論社)など。

山野耕治

一九二七(昭和二)年、大阪府に生まれる。昭和二六年、京都大学文学部(西洋哲学専攻)卒。現在、大阪府立大学教養部助教授。主要論文「プラトンの視点」(西洋古典学研究会)XIX(収録)など。

日下昭夫

一九三一(昭和六)年宮城県に生まれる。昭和二八年、京都大学文学部(西洋哲学専攻)卒。現在、同志社大学文学部助教授。主要論文「スコラ哲学の系譜」(平凡社)「思想の歴史」第三巻、「中世哲学とイスラム哲学」(岩波講座 哲学第一六巻)

編者紹介

1925年 長野県に生まれる  
1949年 京都大学文学部(西洋哲学史専攻)卒  
九州大学助教授、京都大学助教授をへて、  
現在、京都大学(文学部)教授  
著書 「実在と価値―哲学の復讐」(筑摩書房)  
「プラトン著作集・パイドロス」(岩波書店)  
ソポクレス「オイディプス王」(岩波書店)  
アリストテレス「詩学」(筑摩書房)  
ルクレティウス「事物の本性について」(同上)

哲学を学ぶ人のために 定価 1,300円

1972年2月1日 初版発行  
1978年4月10日 2版第5刷発行

検印 廃止

編者 藤 沢 令 夫  
発行者 高 島 国 男

世界思想社

本社 京都市左京区岩倉 下在地町303  
電話代案(72)8500 郵政京都2908  
東京支社 東京都千代田区神田神保町 3-19  
電話 (230) 2483

©1972 N. FUJISAWA Printed in Japan  
落丁・乱丁本はお取替いたします (共同印刷工業・藤沢製本)  
1310-072113-3868